子供に化けた狐

野口雨情

子供に化けて、大人をだます悪い狐がをりました。

三五郎と云ふ百姓が、馬を曳いて帰つて来ますと、道の端に七八つ位の一人の子供が泣いてゐました。

三五郎は、狐が化けてゐるのだと気づきましたから、わざと知らない振りをして通りすぎようとしました。子供は三五郎の方を見い見い余計に泣きました。

どこまでも知らない振りをして三五郎が通つて来ますと、子供は大声をあげて泣き泣き馬の後をついて来ました。

さうするうちに、急に日が暮れて来て、あたりが薄暗くなつてしまひました。まだ日の暮れる筈のないの

に、不思議だとは思ひましたが、空にはお星さまさへチラチラ出て、遠くの森で梟（ふくろふ）の啼く声さへ聞えました。

　後から泣き泣きついて来た筈の子供は、こんどは、いつの間にか三五郎の前に立つて泣き泣き歩いてゐました。

『己（おれ）はちやんと判りきつてゐるのに、知らずにだまさうとする馬鹿な狐だ』と三五郎は心の中で可笑（おかし）くなりましたが、なにしろ斯（か）う日が暮れて来ては、急いで家へ帰らうと馬に乗りました。さうすると、泣き泣き歩いてゐた子供は、馬の口元をとつて別の方の細い道へ

馬を曳き込まうとしました。
　三五郎は馬の上で、
『コラコラ道が違ふ。こつちだこつちだ』
と怒鳴りつけましたが、子供は聞えない振りをして、ずんずん細い別な方の道へ曳いて行きました。
　三五郎は、もう我慢が出来なくなつて
『この狐め』
と馬からとび下りますと、そこはどぶどぶした泥田の中で、どこまでもどこまでも身体が泥の中へもぐつて行きました。
　これは大変だ、どうかしてあがらうと、あせればあ

せるほどだんだんもぐつてしまひました。やうやく足が届いたと思ふと、そこは、広い広い河原の中でありました。

河原は、まだ日が暮れずに、西の方が夕焼で赤くなつてゐましたが、空の色も、石の色も草も、木も、みんな灰色をした、この世とは、まるつきり違つた国でした。

『一体ここは、なんといふ国だらう、なんといふ広い河原だらう』と三五郎は、あつけにとられてゐますと、向ふの方で大勢の子供が、

父さん恋し
母さん恋し
河原の石は
数限りない
チヨン　チヨン
チヨン　チヨン

と、童謡を唄ひながら、石を運んでは積み、運んでは積み、一生懸命に石を積んでゐました。三五郎は子供

達のそばへ行つて。
『モシモシここはなんといふ国だか教へておくれ』
とたづねますと、子供達は口々に、
『小父（をぢ）さん、ここは三途（さんづ）の河原よ』
と云ひました。
三途の河原と聞いて三五郎はびつくりしてしまひました。
『己（おれ）は、たうとう死んでしまつた、なんといふ情ないことになつただらう。道理で今までの世の中とはまるつきり違つてゐる、どうしたらいいだらう』
と悲しくなつて考へてゐますと、子供達は、

『小父さん赤鬼が来るよ。目つかつてごらん、ひどい目に逢ふから。早くどつかへ隠れておいで』

と親切に云つてくれました。三五郎は隠れようとしても、広い河原のことで、隠れ場所がありませんでした。うろうろしてゐるうちに、もう赤鬼は大（おほき）な鉄の棒をついて向ふからやつて来ました。赤鬼は、それはそれは大きな声で、

『コラコラ逃げても駄目だぞツ』

と怒鳴りながら駈けて来て、ギユツと、襟頸（えりくび）を捉（つか）んで、

『お前は、泣いてゐた子供をいたはらずに、馬へ乗つて逃（にげ）ようとしたな』

と力一杯にグーウンと三五郎を抛り投げました。

三五郎は毬(まり)でも投げるやうに投げられてしまひました。

ややしばらくすると、ドシーンと地べたへ落ちましたが、そのまま気絶をしてしまひました。

三途(さんづ)の川は
地獄の一丁目
赤鬼さんに
投げられました

三五郎さんは
三途の川の
赤鬼さんに
投げられました

このこと話そ
このこと聞かそ
三五郎さんは
投げられました

と、どつかで童謡を唄つてゐる声が微（かすか）に耳にはいつ

て来ました。はつと目をあいて見ますとあたりはもう
真暗で、遠くの方には、チラチラ灯も見えてゐました。
『ここは地獄のどこか知ら』
と無性に悲しくなつて来ました。すると、こんどは、

大馬鹿　小馬鹿
大馬鹿三五郎
お馬の上で
何の夢見てる

トツチン　トツチン
トツチンチン

大馬鹿　小馬鹿
大馬鹿三五郎

トツチン　トツチン
トツチンチン

と、狐の声で童謡を唄ひながら囃立（はやしたて）てゐるのが聞えました。

初めて気がついてみますと、三五郎は馬に乗つたまま元の所にゐたのでした。

三五郎は、やつぱり狐にだまされてしまつたのでした。

底本：「定本　野口雨情　第六巻」未來社
１９８６（昭和61）年９月25日第1版第1刷発行
初出：「小学男生」
１９２２（大正11）年８月号
入力：林　幸雄
校正：今井忠夫
２００３年11月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。